



危うし「静岡の近未来」 —人口急減の流れ—商工会議所の調査結果に見る—

静岡市が平成18年度の静岡市産学共同研究委託事業として静岡大学と静岡商工会議所に調査を依頼、その結果が昨年3月、小さな記事として静岡新聞に掲載されていました。

正直、その内容は地元紙の一面を飾るべき内容にも拘らず23面に小さな記事として掲載されていたことに違和感を覚えたのでした、恐らく「市長選挙」を目前にした「時期」がこんな扱いにさせてしまったのでありましょう。その結果この報告書は読んで頂きたい方々には殆ど知られず、「日の目」を見ることもなく忘れられてきました。

このスコープでは何度か本市の「憂慮の材料」として提起してまいりましたが、聞く方も半信半疑の態、市議会では全く問題視もされてはおりません。

そこで、今回敢えて静岡商工会議所からその原本を頂き、「人口急減の根拠」を具体的数値でお知らせいたします。

この調査目的は市行政が将来の消費財市場の長期展望を知るための調査依頼でありましたが、その報告書が「まさか」の内容に、慌てた当局が封緘してしまつた行為と思われる。

私自身も少子化時代を反映して、都市の先細りを案じてきましたが、今回の報告書には正直、愕然としたところではあります。

表の人口動態を見れば歴然でしょうが、2025年から30年以降の人口減少の曲線は見ての通りすさまじいものです。

ご案内のように日本は2005年に「人口減少局面

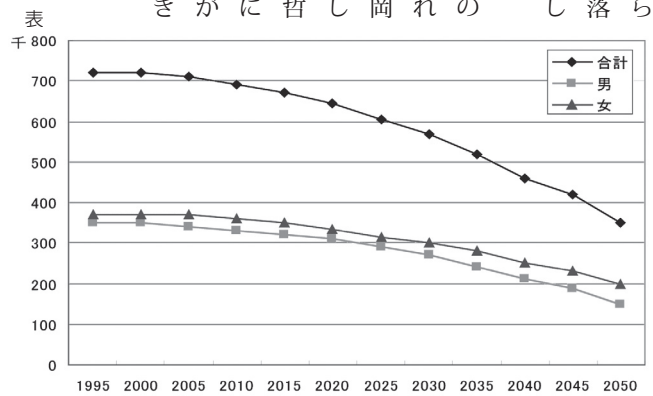
にはいった」と云われ、国勢調査の結果をみても県人口のピークは2005年でした。ところが本市の人口ピークは1995年であり、人口減少の傾向は他都市に先駆ける結果となつたのであります。

その結果、40年後の本市の人口は表の通り今日を100とすれば、実に48、即ち35万人を切ると調査報告書は予測しているのであります。

考えてみてください、少子高齢化と人口流失、大都市への集中化が愈々進展する中で、人口規模が半分になるということは、若者は不在にして老人が溢れたとき、一体誰がこの街を支えるのですか、更に道州制と

いう馬鹿げた官僚たちの試みが若し具体化したときには、残念ながらこの街は確実に落ちぶれていくでしょう。

「待てば海路の日和あり」…これがこれまでの静岡市民の哲学でした。しかしその哲学が邪魔な時代に入った事を誰もが認識していただきたいと存じます。



ドン・キ・ホーテにはなりません。 —私の「カジノ」誘致戦略—

このスコープで幾度となく私は本市の活性化の手段として「カジノ」誘致について提唱してまいりましたが、愈々具体的行動の「時」に至つたと考え先月より行動を始めたところでありました。

そのスタートとして静岡県議会に「カジノ」誘致議員連盟を組織するところから初めました。既に新聞等に報道されている通り与野党の40余名の議員が私の呼びかけに呼応して参画していただき、代表には下田選出の森議員が、呼びかけ人の私は事務局長として企画運営に携わるつもりであります。

正直、突然でしかも奇想なこの募集に対し私自身も、多数の議員の参加を戴いた事に驚きを隠せ

ませんでした。恐らく「カジノ」誘致を目的とするこの連盟に対し、県民の「満腹」のご理解を戴くには容易ではない処と存じますが、近未来の静岡を思う時、議員各位が手をこまねいているときでないとの認識からとられた行動と理解します。

私自身、長い間の思索の果てに辿りついた静岡市の再生の手立てとして、「カジノ」構想は生れたのであります。最近、このことについての私の思いを綴つた「コンベンションシティへの挑戦」というタイトルの小冊子を刊行いたしましたのでご希望があればご連絡ください。

お陰さまで、この所、近隣の経済界の方々から、「カジノ」に対する好意のご意見や、団体の研修の講師としてお声を掛けて頂いております。

この町の「行政」に生涯を懸けた男が最後に試みる「後世への贈り物」と考え、思いっきり挑戦してまいります。

火消し屋・新門辰五郎

静岡市消防団の生みの親・新門辰五郎の存在も業績もあまり知られておりません。

新門とは通称であり、苗字は町田でしたが「町田辰五郎」ではひ弱に思えるのでやはり「新門」が似合うでしょう。呼称の起りは浅草寺伝法院に建てた新門を火災から守ったことから、以降「新門」の二文字が付きました。

江戸の町火消しの頭領でありましたが、寧ろ一般的には、幕末の侠客として名を馳せていました。当時のお江戸には町火消しと大名火消しが存在し、ある時、辰五郎は火災の際の縄張り争いから喧嘩となつて一時入獄しましたが、大政奉還の後は徳川慶喜公の護衛となつて、駿府に赴くところとなりました。

当時の宝台院は1万坪の広大な敷地を持ち、その一画に書院を設け、ここに慶喜公はひと時寓居したのであります。

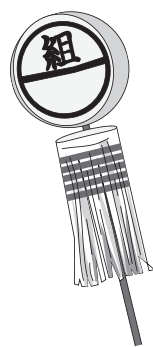
慶応4年の暮れ、桶屋町から出火した火災は辺りを嘗め尽くすほどの大火となりましたが、辰五郎達の懸命な消火作業によつて慶喜公の住処は守られたのであります。その後、慶喜公は浮月楼に移り住みましたが、明治23年東海道線が敷設されるに

及んで、蒸気機関車の騒音を理由に西草深に転居する事になりました。

さて、新門辰五郎は駿府に留まること4年、その間に駿府を火災から守る組織として市中全域に火消し組を編成したのであります。

更に静岡祭り、祝いの時等に唄われる

「木やり」はこの時もたらされたものです。火の見櫓の建設、各種消火器の改良など多大な功績を残し、明治4年帰京するところとなりましたが、この間、終ぞ侠客の片鱗も見せる事はなかったと言われております。



一寸一言 私の雑記帳から

「ジューン・ブライド」について

昨夜(12日)のテレビ番組で、沢山の和製英語の中から、本物の英単語を探し出すクイズ番組を何気なく見ていた私の脳裡に「一寸一言」欄のテーマとして思い付きました。

ナイター、トンカツ、バスガイドなど日常、なんの疑問も抱かずに外来語と信じて使用している言葉の中には日本人が勝手に作った単語が巷に溢れています。

この番組では10の単語の中で「ハネムーン」だけが本物の英単語でした。

さて、今月は「ジューン・ブライド」と云われヨーロッパでは昔から6月に結婚する

る花嫁は「幸福」を約束されると云われて来ました。それは6月が家庭の守護神「ジュノー」の月であるからであります。

何となく「ハネムーン」も和製英語に思えますが、直訳すれば「蜜月」、即ち結婚した当月を意味する場合、或いは新婚旅行そのものを意味したりしますが、それでは何故、「蜜の月」なのでしょう。

実はヨーロッパにおいては、結婚した一ヶ月間は毎日蜂蜜を食べる習慣がありました。それはご想像の通り新婚の時になによりも体力が大事です、そこで蜂蜜が「元気の源」として多く採られていたということでした。



傘の存在感



梅雨の季節となりました。雨の日の必需品といえば傘。傘売り場には色とりどりの傘の花が咲いています。高性能でおしゃれな傘が増える一方で、コンビニで売っているビニール傘の人気もあなどれません。天気予報とはうらはらに突然降ってくる雨に対しては、やはり手軽なビニール傘が一番!

最近では環境に配慮して、ビニール傘のリサイクル使用も行われているようです。また、紫外線から肌を守るための日傘も、年齢を問わずポピュラーなものとなりました。男性が日傘を使う姿はまだ見かけませんが、紫外線の有害性を考えると、これからは男性の日傘姿も増えるかもしれません。お天気に関係なく、夏のお出かけには傘が必需品・・・という時代になりそうです。

もっとも、長い間、雨が止んだ途端に「余計なもの」扱いをされてきた傘にとっては、晴れても日傘として活躍するチャンスが増えたことは、うれしいことなのかもしれません。お店や乗物の中に置きざりにされてしまう傘の数も、少し減るといいですね。

勉強会のお知らせ

日時 7月18日(金) 19時より
場所 天野進吾事務所
講師 (財)静岡健康管理センター
所長 遠山和成先生

(元県立総合病院副院長)

出席ご希望の方は、事務所迄、ご連絡をお願いいたします。

TEL 054 (245) 7474
FAX 054 (246) 7463

※駐車場の準備がございませんので交通機関をご利用下さい。